

東京市人口動態速報
東京市役所編
昭和十年

14.4
1067



0033215-001

14. 4-1067

東京市人口動態速報

東京市・編

東京市

昭和10至13年

昭11至14

AFD

14.
106

昭和十一年七月十三日刷

昭和十年東京市人口動態速報

(出生・死産・死亡)

東京市役所

例 言

一、茲に公表する統計は、東京市統計報告例に依り區長の作成にかゝる人口動態調査個票を集計した結果であつて、昭和十年中本市に於ける現住人の出生、死産、死亡に關する概要である。

一、統計表の編纂は出生に就ては父又は母の住所、死産に就ては産婦の住所、死亡に就ては死亡者の住所に依つた。

一、或年の事實にして同年中に届出のなきものが年々多少あるが、本編に於ては昭和十年の事實に關する届出遅れの分に就ては本年三月末迄に届出ありたるものを追加輯録した。

一、人口動態調査事項中婚姻、離婚に關するものは追てその概要を速報する豫定である。尙昭和十年中の人口動態に關する全面的な詳細なる調査の結果は年を越えて刊行する「第三回東京市人口統計」に就て觀察利用せられむことを望む。

一、過去に於ける統計は現在の市域の計數にして、昭和七年以前の事實に就ては、東京市統計年表所載の資料により編纂した。

一、本統計の比例算出に用ひたる人口は國勢調査施行の年以外の年は推計人口である。

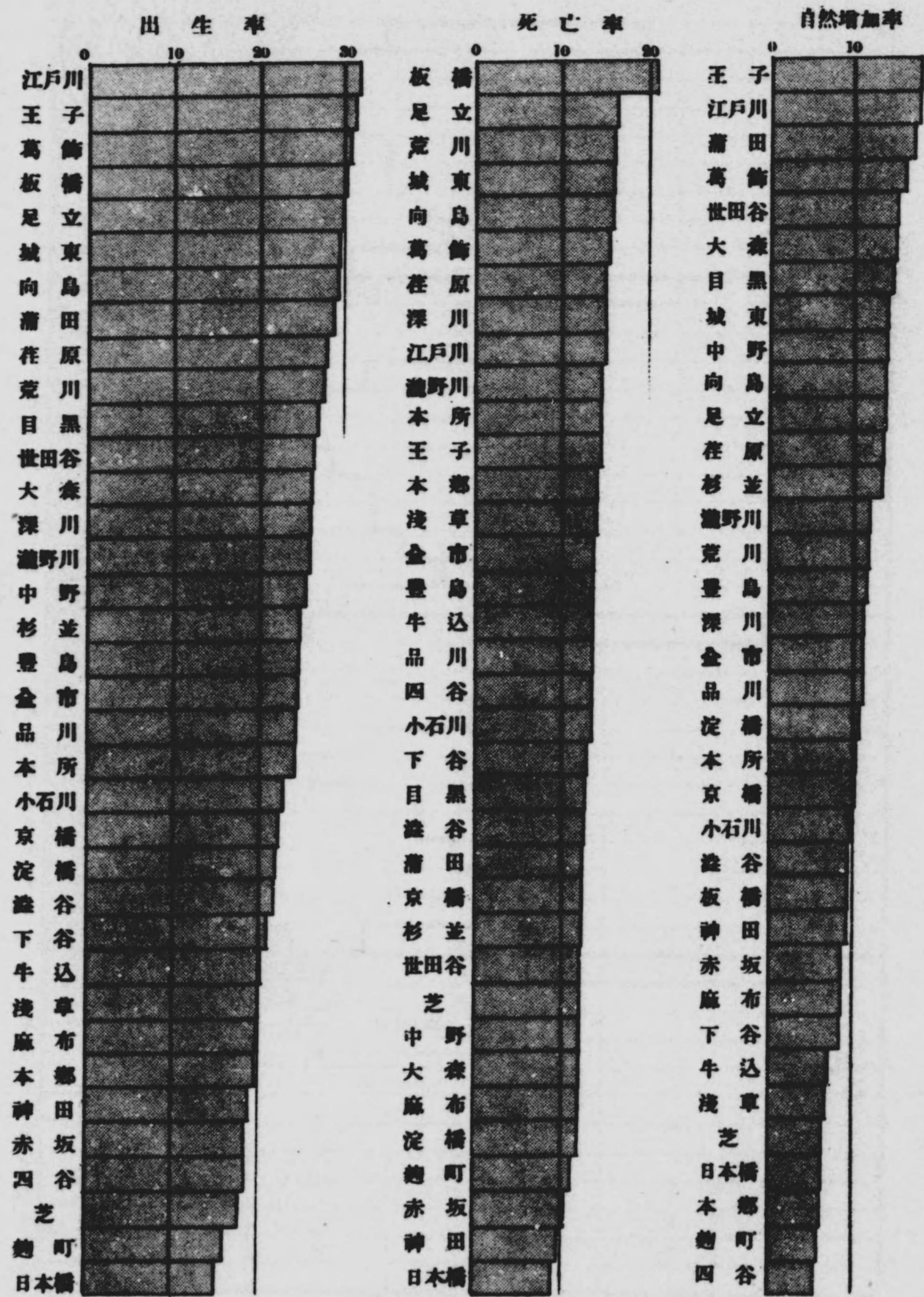
昭和十一年七月十三日

東京市監査局統計課

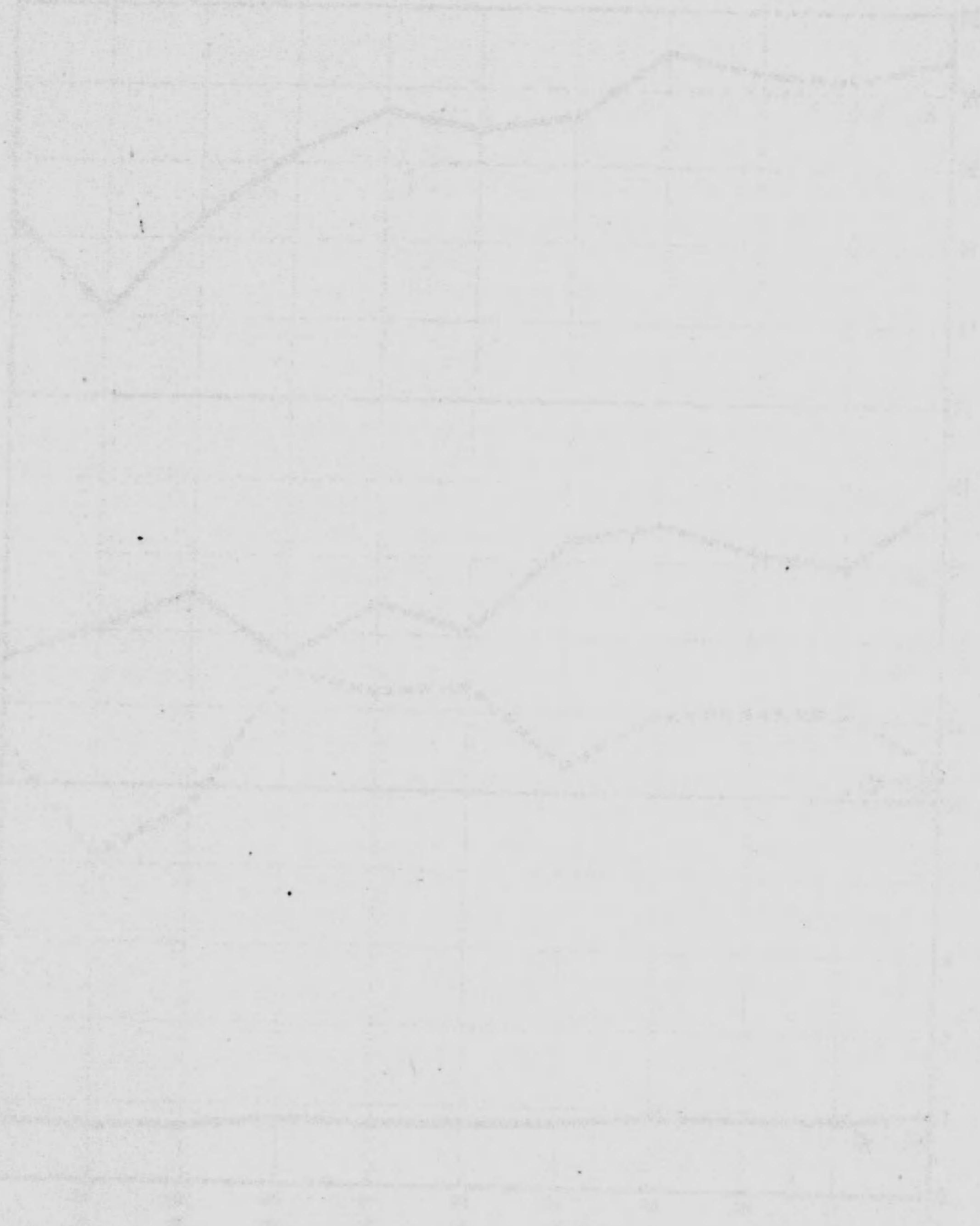


昭和十年區別出生率、死亡率及自然増加率

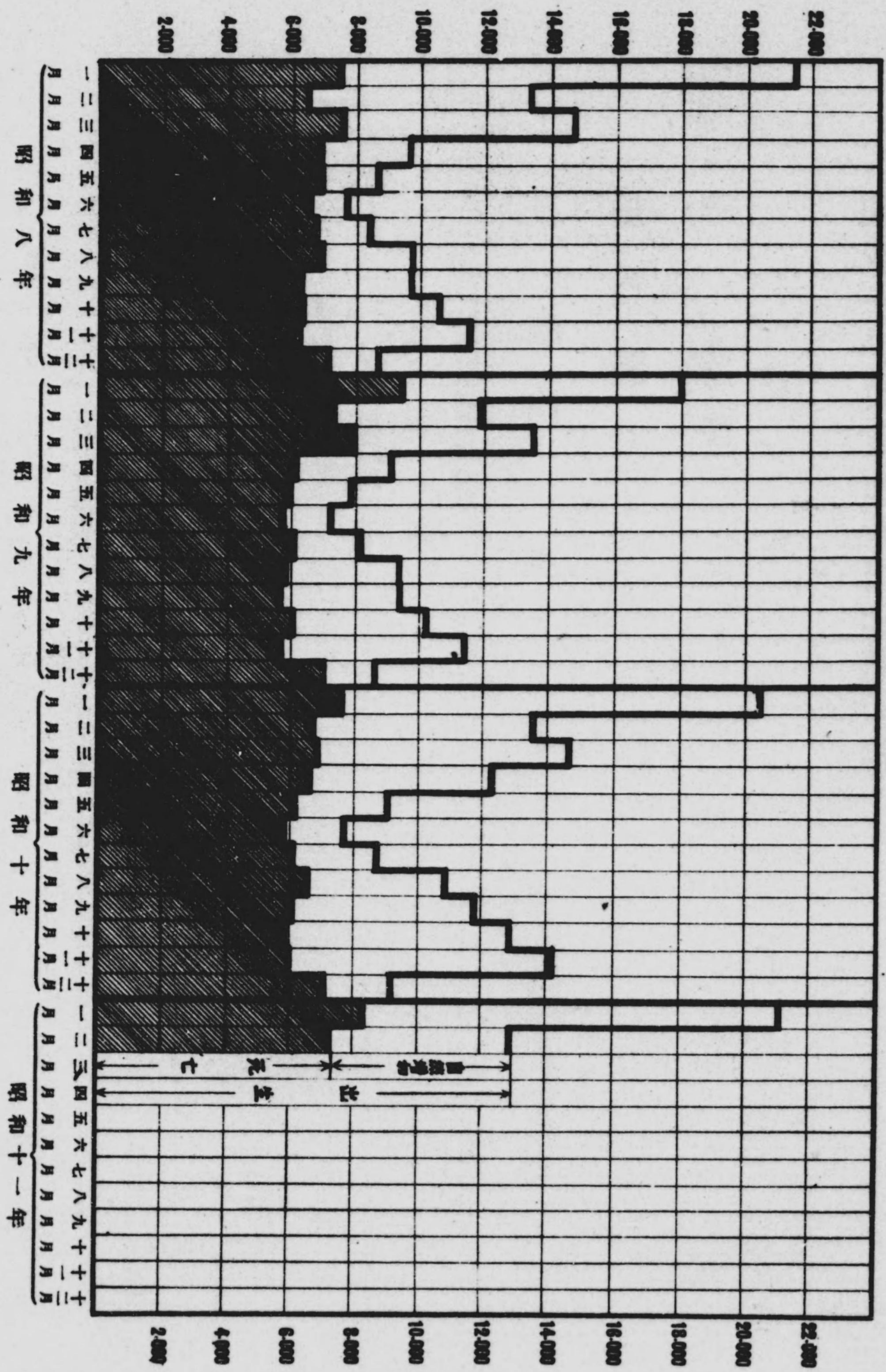
(人口千 = 付)



註 板橋區ノ死亡率著シク高キハ同區内所在ノ養育院ニテ死亡セルモノヲ含ムニ依ル
 試ミニ右ヲ控除スレバ死亡率16.13%トナル



出生、死亡ノ季節的變動



14.4-1067

昭和十年東京市人口動態速報

目次

例言

統計圖

第一部 出生

一、出生數及出生率.....	一
(イ) 總說.....	一
(ロ) 區別出生率.....	一
二、出生の季節.....	三
三、出生兒の體性.....	三
四、出生兒の身分.....	三
(イ) 出生兒の身分.....	五
(ロ) 身分別出生兒の體性.....	五
(ハ) 區別私生兒.....	五

第二部 死産

一、死産數及死産率.....七

(イ) 總説.....七

(ロ) 區別死産率.....七

二、死産の季節.....七

三、死産兒の體性.....九

四、死産兒の懷孕月數.....九

五、死産兒の身分.....一〇

(イ) 死産兒の身分.....一

(ロ) 身分別死産兒の體性.....一

(ハ) 區別私生死産兒.....二

第三部 出生産

一、出生産數.....一三

(イ) 總説.....一三

(ロ) 區別出生産率.....一四

第四部 死亡

二、復産.....一五

(イ) 總説.....一五

(ロ) 體性別復産.....一六

三、復産兒數.....一六

(イ) 出生、死産別復産兒數.....一六

(ロ) 身分及出生死産別復産兒數.....一七

一、死亡數及死亡率.....一八

(イ) 總説.....一八

(ロ) 區別死亡率.....一八

二、死亡の季節.....二〇

三、死亡者の體性.....二一

四、乳兒死亡.....二三

(イ) 總説.....二三

(ロ) 區別乳兒死亡率.....二三

(ハ) 死亡乳兒の體性.....二三

五、死亡者の配偶關係.....二四

第五部 人口の自然増加

- 一、人口の自然増加……………二四
- (イ) 總説……………二四
- (ロ) 區別自然増加率……………二五
- 二、男女人口の自然増加……………二六

第四部 出生

第一部 出生

一、出生數及出生率

昭和七年本市に於ける出生數は一四三、九三〇であつて、日平均三九四となり、出生率は人口千に付二四五〇に達する。之を前年に較ぶれば出生數に於て一八、六三〇、出生率に於て一、七七〇の増加である。出生數を既往に照つて見ると、大正十四年の十一萬臺より累増の傾向を辿り、昭和七年の十四萬臺に垂んとしたるを頂點とし、昭和八年、九年に於て急激の減少を見、昭和十年に至つて再び激増し一四萬臺を遙かに突破し會て見ざる多數を示した。然るに出生率に於ては大正十五年以來大體に於て逐年漸減しつゝあつたのであるが、昭和十年は前年の二二・一三%から一躍二四・五〇%に逆轉した。但し過去十年間に於ては昭和九年以外何れの年にも及ばない。

第一部 出生

第一表 出生果年

年	出生數	人口	人口千に付出生
大正十四年	一四三、九三〇	四〇、九八三	二、八一
大正十五年	一三〇、六八八	四二、六〇八	二、三三
昭和二年	一三六、一八六	四三、八七	二、九〇
昭和三年	一三三、四〇〇	四三、〇三三	二、九〇
昭和四年	一三〇、四〇〇	四三、九七	二、九七
昭和五年	一三〇、四五	四三、八九	二、九七
昭和六年	一三〇、四九	四三、八二	二、九七
昭和七年	一三〇、四九	五三、三〇〇	二、四三
昭和八年	一三〇、八元	五三、三〇〇	二、四三
昭和九年	一三〇、三〇〇	五三、三〇〇	二、四三
昭和十年	一四三、九三〇	五八、七五、六七	二、四三

(ロ) 區別出生率

昭和十年の出生率を新舊兩市部別に見ると、舊市部は二〇・〇六七%で前年に比し一・二三%の増加を見、新市部は二六・八六%で舊市部に比し著しく高く、又前年に比し三・一二%の増加である。各區に於ける出生率の最高は葛飾の三〇・五一%であつて板橋の二九・七三%、江戸川の二九・五七%、王子の二九・二二%、向島の二八・一三%等之に

第一部 出生

亞ぎ第一位より第十五位迄新市部が占めてゐる。反之低率順位に於て第一位より第十一位迄は舊市部が占め、その第一位は日本橋の一三・七七%であつて麹町の二五・四七%、四谷の一七・三三%、神田の一七・四七%、芝の一七・五〇%等之に亞ぐ。要之出生数、出生率兩つながら、全市、舊市部新市部各區何れに於ても前年に比し増加を示したのであるが舊市部に比し新市部の出生率高きこと出生率の葛飾、板橋、江戸川、王子、向島の諸區に於て比較的高きこと及び日本橋、麹町、四谷、神田、芝の諸區に於て比較的lowきこととは最近數年間に於て略々差異を見ない。

第二表 區別出生数

區名	出生数		人口千に付出生	
	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
全 市	13,500	12,500	3.3	3.0
舊 市 部	4,200	4,000	1.2	1.1
新 市 部	9,300	8,500	2.1	2.0
神 田	2,300	2,200	0.6	0.6
日 本 橋	1,500	1,400	0.4	0.4
京 橋	2,800	2,700	0.8	0.8

區名	出生数	人口千に付出生
芝	3,100	0.9
麻 布	1,500	0.4
赤 坂	1,000	0.3
四 谷	1,000	0.3
牛 込	2,000	0.6
小 石 川	2,000	0.6
本 郷	2,000	0.6
下 谷	2,000	0.6
淺 草	2,000	0.6
本 所	2,000	0.6
深 川	2,000	0.6
新 市 部	8,500	2.0
品 川	4,000	1.1
目 黒	3,000	0.8
花 原	3,000	0.8
大 森	3,000	0.8
蒲 田	3,000	0.8
世 田 谷	4,000	1.1
澁 谷	4,000	1.1
淀 橋	4,000	1.1
中 野	4,000	1.1
杉 並	4,000	1.1
豊 島	5,000	1.4

區名	出生数	人口千に付出生
瀧 野 川	2,500	0.7
荒 川	7,500	2.1
王 子	4,500	1.3
板 橋	3,500	1.0
足 立	4,500	1.3
向 島	4,500	1.3
城 東	4,500	1.3
葛 飾	2,500	0.7
江 戸 川	3,500	1.0

二、出生の季節

出生と季節の關係を觀るに一月最も多く二〇、五五三で、一年平均一日出生千に付當月の平均は一、六八一を算へ、二月、三月、十一月、十月の順位に相次いで低率となつてゐる。出生の最も少き月は六月であつて、七、七九〇（一年平均一日出生千に付六五九）で、七月、五月、十二月相次いで少く、其の逐月移行の状態は例年と變りはない。

第三表 出生の季節

月	出生数	總數千中各月出生數	一年平均一日出生千に付各月平均出生數
一	20,553	1,000.0	1.681
二	17,000	1,000.0	1.400
三	18,000	1,000.0	1.500
四	19,000	1,000.0	1.600
五	18,000	1,000.0	1.500
六	16,500	1,000.0	1.400
七	17,900	1,000.0	1.500
八	18,000	1,000.0	1.500
九	19,000	1,000.0	1.600
十	18,000	1,000.0	1.500
十一	17,000	1,000.0	1.400
十二	16,000	1,000.0	1.300

第一部 出生

三、出生兒の體性

出生數一四三、九三〇の中男七四、二三一、女六九、六九九で男四、五三二人の超過を示し、女百に付男一〇六・五〇の割合で昭和九年の一〇四・四四に比し男の出生が僅か乍ら高率となつた。更に各區に就いて見るに女百に付男の出生一〇以上の區は葛飾、麻布、世田谷、小石川、淀橋、芝の六區で女兒出生超過の區は四谷、赤坂、足立、麹町の

月	出生数	男	女
一	20,553	11,380	9,173
二	17,000	9,000	8,000
三	18,000	10,100	7,900
四	19,000	10,500	8,500
五	18,000	10,000	8,000
六	16,500	9,000	7,500
七	17,900	9,500	8,400
八	18,000	9,800	8,200
九	19,000	10,200	8,800
十	18,000	10,000	8,000
十一	17,000	9,500	7,500
十二	16,000	9,000	7,000

四區である。

第四表 出生児の體性

年次	總數		公生		私生		女百に付男
	男	女	男	女	男	女	
昭和八年	六,九七七	六,八三三	三,〇二二	三,〇二二	三,九五五	三,九三三	一〇四・七
昭和九年	六,〇二二	六,一八八	三,〇二二	三,〇二二	三,〇六〇	三,〇六〇	一〇四・四
昭和十年	五,二二二	五,〇九二	二,〇二二	二,〇二二	三,二〇〇	三,〇七〇	一〇三・八
神田	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
日本橋	八,〇〇〇	八,〇〇〇	八,〇〇〇	八,〇〇〇	八,〇〇〇	八,〇〇〇	一〇〇・〇
芝	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
麻布	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
赤坂	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
四谷	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
牛込	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
小石川	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
本郷	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
下谷	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
浅草	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
本所	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇
深川	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一,六二二	一〇〇・〇

四、出生児の身分

(イ) 出生児の身分

出生児を身分別に見ると、公生児は一三七、八一二で總數の九五・七五%を占め、私生児(庶子を含む)は六、一一八で四・二五%を占めてゐる。之が昭和八年以降の趨勢を見るに公生児の割合は逐年増加し、私生児の割合は漸減の状態にあり、前年に比し昭和十年はこの傾向特に著しい。

第五表 身分別出生

年次	總數		公生		私生		女百に付男
	男	女	男	女	男	女	
昭和八年	一三,八〇〇	一三,〇〇〇	六,七五五	六,〇四五	七,〇四五	六,九五五	一〇四・七
昭和九年	一三,〇〇〇	一三,〇〇〇	六,〇二二	六,〇二二	七,〇〇〇	六,九〇〇	一〇四・四
昭和十年	一三,〇〇〇	一三,〇〇〇	五,〇二二	五,〇二二	八,〇〇〇	七,〇〇〇	一〇三・八

(ロ) 身分別出生児の體性

出生児の身分別に於ける男女の割合は、公生児に於て女百に付男一〇六・七、私生児に於て一〇三・一で、共に男超過であり、公生児に於て超過の程度稍々高く、既往の傾向と

年次	公生		私生		女百に付男
	男	女	男	女	
昭和八年	三,〇二二	三,〇二二	三,九三三	三,九三三	一〇四・七
昭和九年	三,〇二二	三,〇二二	三,〇六〇	三,〇六〇	一〇四・四
昭和十年	二,〇二二	二,〇二二	三,二〇〇	三,〇七〇	一〇三・八
新市部	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
品川	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
目黒	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
荏原	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
大森	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
蒲田	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
世田谷	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
澁谷	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
中野	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
杉並	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
豊島	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
荒川	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
板橋	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
足立	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
向島	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
葛飾	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇
江戸川	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一,〇二二	一〇〇・〇

一致してゐるが、前年に比し孰れも男の超過が高率となつた。

第六表 身分別出生児の體性

年次	公生		私生		女百に付男
	男	女	男	女	
昭和八年	三,〇二二	三,〇二二	三,九三三	三,九三三	一〇四・七
昭和九年	三,〇二二	三,〇二二	三,〇六〇	三,〇六〇	一〇四・四
昭和十年	二,〇二二	二,〇二二	三,二〇〇	三,〇七〇	一〇三・八

(ハ) 區別私生児

出生百中私生児の割合を各區に就いて見るに、その最高は浅草の五・四九%で、下谷(五・三九%)、足立(五・二六%)小石川(五・〇六%)の諸區相並いで高く、最も低きは本郷であつて二・七八%を示し、日本橋(二・九四%)、杉並(三・二一%)、中野(三・三〇%)、蒲田(三・三五%)等相次いで低率である。私生児の割合は前年に比し全般的に低下を見たが、唯だ麹町、赤坂、下谷、板橋、向島の五區のみは僅か乍ら高率となつた。

第一部 出生

第七表 區別私生兒

區名	私生兒		出生百中私生兒	
	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
品川	三九	三九	四・三	四・三
新市	三九	三九	四・三	四・三
深川	三三	三三	四・三	四・三
本所	三三	三三	四・三	四・三
浅草	三三	三三	四・三	四・三
下谷	三三	三三	四・三	四・三
本郷	三三	三三	四・三	四・三
小石川	三三	三三	四・三	四・三
牛込	三三	三三	四・三	四・三
四谷	三三	三三	四・三	四・三
赤坂	三三	三三	四・三	四・三
麻布	三三	三三	四・三	四・三
芝	三三	三三	四・三	四・三
京橋	三三	三三	四・三	四・三
日本橋	三三	三三	四・三	四・三
神田	三三	三三	四・三	四・三
麹町	三三	三三	四・三	四・三
舊市部	三三	三三	四・三	四・三
新市部	三三	三三	四・三	四・三

六

區名	昭和九年	昭和十年
江戶川	一六	一六
葛飾	一七	一七
城東	一七	一七
向島	一七	一七
足立	一七	一七
板橋	一七	一七
王子	一七	一七
荒川	一七	一七
瀧野	一七	一七
豊島	一七	一七
杉並	一七	一七
中野	一七	一七
淀橋	一七	一七
世田谷	一七	一七
浦田	一七	一七
大森	一七	一七
荏原	一七	一七
目黒	一七	一七

第二部 死産

一、死産數及死産率

(イ) 總説

昭和十年中本市に於ける死産數は八、九一六であつて、普通死産率即ち人口千に對する死産の割合は一・五二に該る。之を既往に遡つて見るに、死産數は大正十四年の八千臺より一時は七千臺に減少を見たが、最近は常に八千臺を持續し、昭和十年の如きは九千に垂んとする勢である。但し普通死産率に就いて見るに、大正十四年の一・〇一%より逐年顯著な低減を果ね、最近數年は一・七%を超えることなく、就中昭和九年の如きは一・四三%の會つて見ざる低率を示したのであるが昭和十年に至りて一・五二%即ち前年に比し〇・〇九%の増加となつた。

第八表 死産 累年

年次	死産	人口千に對する死産	出生百中死産
大正十四年	八、三三	二・〇一	六・三
昭和十年	八、九一六	一・五二	六・三

第二部 死産

(ロ) 區別死産率

各區に於ける特殊死産率即ち出生(出生死産の和)百中死産の割合を見るに、最高を示すは神田の八・〇五であつて、下谷(七・六三)、本郷(七・一七)、芝(七・〇八)等の諸區次に高く、六・〇〇%以上の區は舊市部に十區を算し、新市部は僅かに王子、板橋の二區に過ぎない。その最低は赤坂の二・二七で著しく低く、麻布(四・五九)、江戸川(五・〇七)、中野(五・一四)、目黒(五・一五)、瀧野川(五・一七)の諸區次に低率である。かくて舊市部六・四六%、新市部五・五三%で舊市部は新市部に比し〇・九三%高率である。更に之

七

第二部 死産

を前年と比較するに舊市部に於ては、神田、芝、四谷、本郷、下谷、浅草、本所及深川の八區は何程か高率となつたが舊市の平均死産率は六・六〇より六・四六に減退した。而して新市部に於ては澁谷、豊島、王子、板橋、向島及城東を除く十五區は何程か低率となり、新市部の平均死産率は五・八三から五・五三に低下し、かくして全市の死産率は前年の六・〇九から五・八三に減退した。

第九表 區別死産

區名	死産數		出産百中死産	
	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
全市	八、二二六	八、二六六	六・〇九	五・八三
舊市部	二、七〇〇	二、七〇七	六・六〇	六・四六
新市部	五、五二六	五、五五九	五・八三	五・五三
神田	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
日本橋	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
京橋	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
芝	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
麻布	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
赤坂	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
四谷	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇

區名	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
牛込	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
小石川	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
本郷	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
下谷	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
浅草	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
本所	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
深川	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
新市部	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
品川	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
目黒	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
荏原	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
大森	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
蒲田	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
世田谷	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
澁谷	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
中野	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
杉並	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
豊島	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
荒川	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇
板橋	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六・二〇	六・二〇

二、死産の季節

區名	昭和九年	昭和十年
足立	三・三三	三・三三
向島	三・〇〇	三・〇〇
城東	二・五五	二・五五
葛飾	一・七七	一・七七
江戸川	一・二二	一・二二

月別に死産指數（一年平均一日死産千に付各月平均一日の死産）を見るに、最高は一月の一・一六一であつて、最低は五月の八・一二である。即ち死産の季節的變動は一月を峰とし五月を谷とする循環的變化であつて、春、夏に多く秋、冬に寡く、その態様は例年と異ならない。

第十表 死産の季節

月	死産數	總數千中	一年平均一日死産千に付各月平均
一	八、九六	一、〇〇・〇〇	一・一六一
二	七、〇六	九・九六	一・〇三三
三	七、〇三	九・九三	一・〇三三
四	六、五五	九・四五	一・〇三三
五	六、五五	九・四五	一・〇三三

三、死産兒の體性（男女不詳を除く）

月	男	女	合計
六月	三・三三	三・三三	六・六六
七月	三・三三	三・三三	六・六六
八月	三・三三	三・三三	六・六六
九月	三・三三	三・三三	六・六六
十月	三・三三	三・三三	六・六六
十一月	三・三三	三・三三	六・六六
十二月	三・三三	三・三三	六・六六

死産兒を男女別に見ると男四、九一五、女三、九二五で男九九〇の超過、即ち女百に付男一二五・二の割合であり、男超過の度は出生に於けるよりも遙かに高率である。昭和八年以降に就いて觀るに男超過の度は僅かづつ減退してゐる。男超過の高い區は葛飾の女百に付男一九〇・八を最高とし、目黒（一四八・三）、大森（一四七・〇）、日本橋（一四五・八）、向島（一四三・三）等の諸區相亞いで高く、女超過を示した區は世田谷の女百に付男九四・六、芝の九七・七の二區である。

第二部 死産

六の割合で共に男の超過を示し、私生児に於て其の度僅かに高率であつて出生の場合とは逆である。昭和八年以降に就いて見るに公生児は、九年に於て男超過が高度になり十年に低率を示し、私生児は反之九年に低率を示し、十年に於て高率となつた。

第十四表 身分別死産児の體性 (男女不詳を除く)

年次	公生児		私生児	
	男	女	男	女
昭和八年	三、四七	二、七四	一、三三	一、三三
昭和九年	三、三六	二、五九	一、二二	一、二二
昭和十年	三、七九	三、六三	一、二九	一、二九

(八) 區別私生死産児

死産百に付私生児の割合を各區に就いて見るに其の最高は、四谷の三五・六四であつて、下谷(三五・三七)、浅草(三一・六五)、深川(二九・二七)、京橋(二九・一七)等の諸區相次いで高く、最低は世田谷の一五・二九であつて、板橋(一七・五三)、杉並(一七・九一)、江戸川(一八・七二)、葛飾(一八・九五)等次いで低率である。

即ち舊市部の區は多く高率であつて、新市部の區は多く低率であり、かくて舊市部の死産児百中私生児の割合は二八・二二%、新市部は二二・五六%で、新市部に比し舊市部は五・六六%の高率である。

前年に比し新舊兩市部共、割合に於て僅かづゝ減少したが、全般的な減少に反し舊市部に於て、京橋、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷の八區、新市部に於て、荏原、大森、澁谷、王子、足立、城東、江戸川の七區は増加した。

第十五表 區別私生死産児

區名	私生死産児		死産百中	
	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
芝	三	七	三・七	三・七
京橋	六	六	六・六	六・六
日本橋	六	三	六・三	六・三
神田	六	三	六・三	六・三
麹町	三	三	三・三	三・三
舊市部	八	九	八・九	八・九
全市	二・一〇	二・一〇	二・一〇	二・一〇
荒川	二	二	二・二	二・二
王子	二	二	二・二	二・二
板橋	七	七	七・七	七・七
足立	七	六	七・六	七・六
向島	六	六	六・六	六・六
城東	六	六	六・六	六・六
葛飾	二	二	二・二	二・二
江戸川	二	二	二・二	二・二

區名	公生児		私生児	
	男	女	男	女
麻布	三・三	二・六	一・九	一・九
赤坂	三・三	二・六	一・九	一・九
四谷	三・三	二・六	一・九	一・九
牛込	三・三	二・六	一・九	一・九
小石川	三・三	二・六	一・九	一・九
本郷	三・三	二・六	一・九	一・九
下谷	三・三	二・六	一・九	一・九
浅草	三・三	二・六	一・九	一・九
本所	三・三	二・六	一・九	一・九
深川	三・三	二・六	一・九	一・九
新市部	三・三	二・六	一・九	一・九
品川	三・三	二・六	一・九	一・九
目黒	三・三	二・六	一・九	一・九
大森	三・三	二・六	一・九	一・九
蒲田	三・三	二・六	一・九	一・九
世田谷	三・三	二・六	一・九	一・九
澁谷	三・三	二・六	一・九	一・九
中野	三・三	二・六	一・九	一・九
杉並	三・三	二・六	一・九	一・九
豊島	三・三	二・六	一・九	一・九
池袋	三・三	二・六	一・九	一・九

第三部 出産

第三部 出産

一、出産數及出産率

(イ) 總説

昭和十年中本市に於ける出産は一五二、八四六であつて、一日平均四一九となり出産率即ち人口千に付産の割合は二六・〇一に該る。之を前年に較ぶれば出産數に於て一九、四二〇、出産率に於て二・四五%の増加である。

出産數を既往に遡つて見ると大正十四年の十二萬臺より選増して昭和三年には十四萬を突破するに至り、昭和四年は僅かに低下したが再び増加して昭和七年には十五萬に垂

第三部 出 産

んとする勢であつた。昭和八年、九年には再轉して十四萬臺、十三萬臺に低下したが昭和十年には一躍十五萬を超過し會つて見ざる出産數を示すに至つた。

次に出産率を見るに大正十四年の三〇・八一%を最高として、昭和三年迄三〇・〇%臺を彷彿したが、昭和四年には三〇・〇%臺を割るに至つた。爾來遞減の傾向を辿り昭和九年には一三・五六%と低下し、昭和十年には幾分高率を示して二六・〇%と上昇したが過去十年間に於ては昭和九年以外何れの年にも及ばない。

第十六表 出 産 累 年

年 次	總 數	出 生	死 産	人口千に 付 出 産
大正十四年	二六、三三三	二八、〇七七	八、三三三	三〇・八一
大正十五年	二六、三六二	二〇、六八八	七、八七四	三〇・七
昭和二年	二〇、二二五	二六、一八六	七、九七九	三〇・元
昭和三年	二四、六九一	二五、〇〇〇	八、一八一	三〇・九
昭和四年	二六、四二一	二〇、四四〇	七、六一一	元・九
昭和五年	二四、六九五	二五、五八五	八、二〇〇	元・五
昭和六年	二四、六二二	二五、四四九	八、一九三	元・〇三
昭和七年	二六、六六〇	二五、九四四	八、七六六	二七・九

一四

昭和八年	昭和九年	昭和十年
一四、三三七	一三、四三六	一五、八四六
一三、八八八	一三、三〇〇	一三、九六〇
八、五八八	八、二二六	八、九六六
二六・三	二五・六	二六・〇

(口) 區別出産率

昭和十年の出産率を各區に就いて見ると、最高は江戸川の三三・四〇%であつて、王子(三三・二一%)、葛飾(三二・五六%)、板橋(三二・〇八%)、足立(三一・六四%)等の諸區相亞いで高く、その最低は麴町の二四・七二%であつて、日本橋(一九・九六%)、赤坂(一九・〇六%)、芝(一九・一七%)、四谷(一九・八二%)の諸區次に低率である。一般に舊市部に比し新市部に於て出産率高く、舊市部二二・一〇%新市部二八・四四%でその差は六・三四%である。

之を前年に較べると舊市部一・二八%、新市部三・二三%の増率を示し、各區に就いても淺草を除き孰れの區も高率となつた。

第十七表 區別出産率

全 市	出 産		人口千に付 出 産	
	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
全 市	二五、四四六	二五、八四六	二五・六	二六・〇

區 別	總 數	出 生	死 産	人口千に 付 出 産
舊市部	一〇、五三三	一〇、六六五	二〇・八二	三三・〇
神 田	八、八八	一〇、六六	一四・六六	二四・七三
日本橋	二、六六六	二、七七一	一九・八六	二〇・四
芝 橋	一、六六三	一、八七	二五・三	二五・九六
京 橋	三、〇八〇	三、四四八	二二・八七	三三・四〇
麻 布	三、六六六	三、六七七	一九・九	元・七
赤 坂	一、〇七五	一、二九	一八・〇四	一九・八二
四 谷	一、九三三	一、五三	一八・五	一九・八二
牛 込	二、九四四	二、七九	二〇・八	二二・四
小 石	三、〇〇六	三、五三三	二二・元	二四・〇二
本 郷	二、七六五	二、九三	二〇・〇	三三・三
下 谷	三、五三三	四、二九	二〇・四	三三・五
淺 草	五、三三三	五、八八	二二・三	三三・元
本 所	六、二七七	七、一七	二四・三	三三・九
深 川	四、九〇三	五、九〇	二五・八三	三三・九
新 市 部	八、九〇〇	一〇、一八一	二五・三	元・四
品 川	五、〇〇〇	五、二二	二五・二	三三・六
目 黒	三、六六九	四、二二	二五・六	元・三
荏 原	三、九六六	四、七四〇	三三・四	元・六
大 森	四、七六六	五、五二七	二四・九〇	三〇・九
蒲 田	三、六六〇	四、四九	二六・四	三〇・三
世 田 谷	四、二二	五、二六七	二四・九	三〇・三

第三部 出 産

二、複 産

(イ) 總 説

昭和十年中本市に於ける複産は八二八であつて分娩千に付五・四五に該り、之を前年に較べると複産數に於て五六を増加したが分娩總數に對する割合は〇・三七%の減少である。複産の絶對的增加にも不拘、相對的減少を示すのは

區 別	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
澁 谷	四、七七〇	五、四二一	二〇・九	二五・〇四
中 野	四、〇四八	四、七六七	二〇・七	二五・一七
杉 並	四、三三七	五、〇〇四	二二・四二	二六・七
豊 島	六、三三五	六、九七五	二二・六	二六・三
瀧 野	二、七六六	三、二二	二二・七〇	二七・八
荒 川	八、〇九二	九、四八八	二四・五三	二九・〇九
王 子	四、八四六	五、六八〇	三〇・三	三三・三
板 橋	四、一五〇	四、八四〇	二九・八	三三・〇八
足 立	四、六三二	五、五二五	二九・五三	三三・四
向 島	五、三三三	五、八一	二六・四	三三・三
葛 飾	四、六七七	五、三四五	二七・八一	三三・三
江 戸 川	三、〇二	三、四四一	二七・六	三三・五
全 市	三、六六八	四、三三六	二九・八〇	三三・四〇



第三部 出 産

出産總數の激増したことに依る。

複産中雙産は八二であつて、複産百中九九・一六を占め、三産は僅か七で其の割合も〇・八五に過ぎない。

第十八表 複産件數

年次	分娩數	複産		
		單産	分産千中	複産百中
昭和八年	一三、八八二	一、八三三	一、三三三	一、九六六
昭和九年	一三、六八三	一、七三三	一、三三三	一、九六六
昭和十年	一三、〇二五	一、八三三	一、三三三	一、九六六

(口) 體性別複産

複産を産兒の體性別に見るに雙産にありては二男のもの最も多く三五五を算し總數の四三・三五%を占め、二女之に次ぎ三一八(三八・〇〇%)で一男一女は、一四五(一七・七〇%)である。前年に較べると何れも何程かの増加を示したが、二男の程度は相対的に減少した。

三産にありては三兒とも男の場合多く四件で三女二件、一男二女一件である。

第十九表 産兒の體性別雙産數 (體性不詳を除く)

年次	總數	種別			
		二男	一男一女	二女	二男一男一女
昭和八年	七七	三五	一七	一五	一〇
昭和九年	七六	三五	一六	一五	一〇
昭和十年	八二	三五	一五	一五	一七

産兒の體性別三産數 (體性不詳を除く)

年次	總數	種別		
		三男	二男一女	一男二女
昭和八年	六	二	二	二
昭和九年	六	二	二	二
昭和十年	七	四	一	二

三、複産兒數

(イ) 出生、死産別複産兒數

複産兒を出生、死産に分つに、雙産にありては産兒總數一、六四二中出生一、三八九(八四・五九%)、死産二五三(一五・四一%)であつて、三産に在りては産兒總數二一中出生一五(七二・四三%)、死産六(二八・五七%)で死産の割合は三産に於て遙かに高い。昭和八年以降の趨勢を見るに三産

は資料僅少に付即断は許されぬが、雙産に於ける死産は漸増の傾向が窺はれる、即ち昭和八年一一六、九年一四六、十年二五三と増加し、その總數に對する割合も、昭和八年七・七六%、九年九・五三%、十年は一躍一五・四一%に激増した。

第二十表 出生死産別複産兒數

種別	昭和十年		昭和九年		昭和八年	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
雙産	一、六三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
三産	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
總數	三、〇〇〇	二、六六六	二、六六六	二、六六六	二、六六六	二、六六六
出生	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
死産	一、六六六	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三

(ロ) 身分及出生、死産別複産兒數

雙産、三産を含めた複産兒を身分別に見ると公生兒は一、五五〇で、中出生一、三五五(八七・四二%)、死産一九五(一二・五八%)の割合であり、私生兒は一一三で、出生四九(四三・三六%)、死産六四(五六・六四%)の割合を示し私生

兒に於て死産の程度著しく高い。

昭和八年以降に就いて見るに公生兒に於ける死産の割合は一四・三四%より、昭和九年僅かに増加して一四・四五%となり、昭和十年には一二・五八%と減少したるに反し、私生兒に於ける死産の割合は昭和八年の二六・四七%より九年には四五・三〇と飛躍し更に十年には五六・六四%と激増した。

第二十一表 身分及出生死産別複産兒數

種別	昭和十年		昭和九年		昭和八年	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
公生兒	一、五五〇	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
私生兒	一一三	一、三三三	一一三	一、三三三	一一三	一、三三三
總數	一、六六三	二、六六六	一、四四六	二、六六六	一、四四六	二、六六六
出生	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
死産	三三〇	一、三三三	一一三	一、三三三	一一三	一、三三三

第四部 死亡

一、死亡数及死亡率

(イ) 總説

昭和十年中本市に於ける死亡は、七八、〇九六で一日平均二二四となり、死亡率即ち人口千に對する死亡の割合は一三・二九に該る。之を前年に較べるに死亡數に於て一、七三〇、死亡率に於て〇・七一%の減少である。

翻つて既往に於ける死亡數の趨勢を窺ふに大正十四年の七萬三千より、大正十五年の六萬八千を最低、昭和四年の七萬九千を最高とし常に七萬臺を上下したが、昭和八年には八萬を突破し最近に於ける最高記録を作つた。爾來漸減し昭和十年には七萬八千臺に減少した。死亡數の變動は不規則的であつて一定の増減傾向を認め難い。

次に死亡率を觀るに大正十四年の一七・八八%を最高として大正十五年以降四年間は一六・〇〇%臺を彷徨し昭和五、六兩年は一四・〇〇%臺に低下し更に昭和七年には一

三・六四%に下降したのである。昭和八年に至り稍々逆轉の氣配を見せたが爾後更に再轉して低下を見、昭和十年は一三・二九%であつて曾つて見ざる低率を示した。即ち死亡數の絶對的な減少を認め得ざるに拘らず死亡率の著々たる落調は明瞭に觀取し得る。

第二十二表 死亡累年

死亡年	死亡數	人口	人口千に付死亡
大正十四年	三三、六九	四〇九、八三〇	一七・八八
大正十五年	六、四八	四、二〇、八七	一六・〇七
昭和二年	三三、二二	四、四六、一八七	一六・三三
昭和三年	七六、〇五	四、〇三、一三三	一八・九一
昭和四年	九三、三六	四、七二、九七	一九・九七
昭和五年	七〇、八八	四、九〇、八九	一四・二四
昭和六年	六六、二二	五、〇五、九二	一三・二六
昭和七年	七二、〇六	五、三一、九三〇	一三・八二
昭和八年	八三、三九	五、四六、三〇	一五・〇二
昭和九年	九八、八六	五、六三、〇五〇	一七・三六
昭和十年	六〇、〇六	五、八七、五七	一〇・二一

(ロ) 區別死亡率

死亡率を區別に見ると板橋の二〇・七六%最も高く、(註)

足立(一六・二二%)、荒川(一五・七三%)、城東(一五・五七%)、向島(一五・五四%)、葛飾(一五・三三%)等の諸區之に亞ぎ、最低は日本橋の八・七一%であつて神田(九・三三%)、赤坂(一〇・〇三%)、麹町(一一・四一%)、麻布(一一・四五%)等相次いで低く、一般に新市部に比し、舊市部低く其の死亡率は舊市部一二・四九%、新市部一三・七九%である。

之を前年と比較するに舊市部一・二六%、新市部〇・五二%の低下を見、全般的に低下した。麹町、荏原、荒川、向島及葛飾の五區のみは僅かながら高率となつた。

註、板橋區に於ける死亡數三、一三二中には同區所在の養育院にて死亡せる八四九を含む、今之を控除すると同區に於ける死亡率は一五・一三となる。

第二十三表 區別死亡率

區	死亡數		人口千に付死亡	
	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
全市	九、八六	六、〇六	一四・一〇	一〇・二一
舊市部	三、九六	二、〇六	一三・〇九	一〇・二一
新市部	五、九〇	四、〇〇	一三・七九	一〇・二一

區	死亡數	人口	人口千に付死亡
神田	一、三三	一、二六	一〇・三
日本橋	九一	九三	八・七
京橋	一、七四	一、六〇	一〇・八
芝布	二、三三	二、一五	一〇・九
麻布	一、〇九	一、〇六	一〇・二
赤坂	六六	五九	一一・二
四谷	一、〇一	一、〇〇	一〇・一
牛込	一、八七	一、七四	一〇・七
小石	二、〇一	一、九七	一〇・二
本郷	二、五二	一、九三	一三・〇
下草	三、八七	二、三九	一六・二
浅草	三、八七	三、六七	一〇・五
本所	三、八八	三、八六	一〇・〇
深川	三、三六	三、一〇	一〇・八
新市部	五〇、五七	五〇、〇八	一〇・一
品川	二、五九	二、六四	一〇・一
目黒	一、八六	一、八七	一〇・〇
荏原	二、二七	二、三九	九・五
大森	二、四四	二、三二	一〇・五
蒲田	一、八四	一、八〇	一〇・二
世田谷	二、三三	二、三三	一〇・〇
澁谷	三、〇三	二、八六	一〇・六
板橋	二、〇三	一、九〇	一〇・七

第四部 死亡

中野	二、〇七四	二、〇六二	二、〇〇〇	二、一五五
杉並	二、三三三	二、三三九	二、八三三	二、七三三
豊島	三、六六八	三、五三三	二、三三三	二、三三三
瀧野川	一、六六一	一、〇〇二	一、四六五	二、三九九
荒川	五、一四九	三、一三〇	一、五三〇	一、五七三
王子	二、四八八	二、七五五	一、五三三	一、三九九
板橋	二、九二五	三、一三三	二、〇九三	二、〇六六
足立	二、八六一	二、八三〇	一、八三三	一、六三三
向島	二、八三四	二、九〇三	一、五三三	一、五三三
城東	二、七七八	二、六六四	一、六六四	一、五三三
葛飾	一、六六六	一、六六〇	一、四三三	一、五三三
江戸川	一、六六五	一、八三三	一、五三三	一、四九九

二、死亡の季節

月別に死亡指数(一年一日平均死亡千に對する各月一日平均の死亡)を見ると、最も高きは二月の一、一一八であつて、最も低きは十月の八九二である。之が逐月移行の状況を窺ふに、十月より年末にかけて急激に上昇し、嚴寒二月に至りて其の最高點に達し、陽春と共に激減し、その傾向は六月(九二二)まで持續するが酷暑來と共に漸増し、八月(九九四)を頂點として再下降し十月に至る。即ち死亡の

季節的變動は二月を高き八月を稍々低き分水嶺として夫々前後に向つて低下し、十月を深き、六月を淺き谷とする循環的變化をなすのであつて、その移行の態様は例年と異らな

第二十四表 死亡の季節

月次	死亡數	總數千中	一年一日平均死亡千に對する各月一日の死亡
總數	六、〇六六	一、〇〇〇.〇〇	一、〇〇〇.〇〇
一月	七、六三四	六、〇〇一	一、二二五
二月	六、六三三	八、五三三	一、二二八
三月	六、〇三三	八、六三三	一、〇四二
四月	六、六三三	八、五九九	一、〇三六
五月	六、二五〇	八、〇三三	九、九三
六月	五、八七七	七、五三三	九、九三
七月	六、一五〇	六、八三三	九、九三
八月	六、五九四	八、四三三	九、九三
九月	五、九七七	七、五三三	九、九三
十月	六、二二八	六、八三三	九、九三
十一月	七、一五五	七、五三三	九、九三
十二月	七、一五五	七、五三三	九、九三

三、死亡者の體性

死亡者を體性別に分つに男四一、六九四、女三三六、四〇二で男五、二九二の超過を示し、女百に付男一一四・五の割合である。之を前年と比較するに男女共千人弱の減少を見たが、女百に對する男の割合は僅かながら高率となつた。死亡者男女の割合を各區に就いて見るに孰れの區も男超過で日本橋、京橋、麻布、牛込、小石川、深川、淀橋、荒川及板橋の諸區は女百に付男一一〇・〇以上を占めてゐる。

第二十五表 死亡者の體性

年次	男	女	女百に付男
昭和八年	四一、七三二	三六、〇七三	一一四・五
昭和九年	四一、四九九	三六、〇七三	一一四・五
昭和十年	四一、六九四	三三六、四〇二	一一四・五
芝	一、二九二	一、〇〇〇	一二九・二
京橋	九、三三三	八、〇三三	一一六・三
日本橋	五、三三三	四、〇三三	一一二・三
神田	六、三三三	五、〇三三	一二六・三
麹町	三、三三三	二、〇三三	一一六・三
豊島	三、三三三	二、〇三三	一一六・三
瀧野川	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
荒川	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
王子	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
板橋	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
足立	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
向島	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
城東	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
葛飾	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
江戸川	一、三三三	一、〇三三	一一三・三

瀧野川	八、三三三	七、三三三	一一三・三
豊島	一、八八八	一、〇三三	一一六・三
杉並	一、七三三	一、〇三三	一一六・三
中野	一、〇九〇	九、七三三	一一三・三
淀橋	一、〇三三	八、七三三	一一三・三
世谷	一、四九一	一、〇三三	一四三・三
蒲田	九、三三三	一、〇三三	一〇八・三
大森	一、三三三	一、〇三三	一三三・三
荏原	一、三三三	一、〇三三	一三三・三
目黒	九、三三三	八、三三三	一一一・三
品川	一、三三三	一、〇三三	一一三・三
新市	二、六六六	二、三三三	一一四・三
深川	一、七三三	一、〇三三	一一六・三
本所	二、〇三三	一、八三三	一一一・三
浅草	一、九三三	一、七三三	一一一・三
下谷	一、九三三	一、七三三	一一一・三
本郷	一、〇三三	八、三三三	一一三・三
小石川	一、〇三三	八、三三三	一一三・三
牛込	九、三三三	七、三三三	一一三・三
四谷	五、〇三三	四、三三三	一一三・三
赤坂	三、三三三	二、三三三	一一三・三
麻布	三、三三三	二、三三三	一一三・三

第四部 死亡

荒川	二、八〇一	二、三三九	二、〇七五	二、〇七五
王子	一、二六八	一、〇七五	一、〇七五	二、六〇五
板橋	一、八七九	一、〇三三	一、〇三三	二、四〇五
足立	一、四三三	一、三六八	一、三六八	二、〇〇九
向島	一、三〇〇	一、三六二	一、三六二	二、〇〇九
葛飾	一、二六四	一、二六〇	一、二六〇	二、〇〇九
江戸川	八、九七九	七、三三二	七、三三二	二、〇〇九

四、乳児死亡

(イ) 總説

昭和十年中本市に於ける一歳未満の死亡児は一四、〇九一を算し乳児死亡率即ち出生百に對する一歳未満者の死亡は九・七九を占め總死亡中一八・〇四%に該る、之を既往に遡つて見るに昭和八年の一五、八二九より一四、五一五に減少し更に昭和十年には四二四の減少を見た。乳児死亡率に就いても昭和八年の一・七四%、昭和九年の一・五八%より昭和十年には九・七九%に低下し、前年に較べて一・三九%の低減である。

第四部 死亡

神田	三三〇	一、五九	九、八八	七、七五
日本橋	一、二六	一、四三	八、七三	八、六六
京橋	二、九三	二、九〇	一、〇一九	九、八
芝布	三、〇〇	二、五〇	一、〇〇九	八、三三
麻坂	一、六三	一、二一	一、〇〇九	八、三三
赤坂	七、七	七、七	七、七	五、二四
四谷	一、九	一、八	一、〇六	八、六
牛込	二、六四	二、二二	一、〇六	九、六
小石川	三、〇五	二、九	一、〇三	八、〇五
本郷	二、七	三、〇	九、六	七、九
下谷	四、三	三、七	一、二八	九、四
浅草	三、三	三、〇	一、〇六	二、七
本所	八、〇	八、五	一、三六	二、三
深川	六、四	六、九	一、四一	二、三
新市	九、五九	九、五九	一、二一	九、八〇
品川	三、三	三、三	一、〇九	八、九三
目黒	三、九	三、二	九、六	八、四〇
荏原	四、三	四、二	三、九六	一、〇三
大森	四、三	四、四	九、五	七、三
蒲田	三、三	三、一	九、六	八、五
世田谷	四、四	三、九	九、五	七、六
澁谷	四、三	四、三	一、〇六	八、五
澁谷	三、一	三、一	九、五	七、七

第二十六表 乳児死亡

昭和八年	死亡總數	乳児死亡	死亡總數	出生百に對し乳児死亡
昭和九年	八、三三九	一、五八二	一九、三	二、七四
昭和十年	九、八七九	一、四〇九	一八、〇	九、九

(ロ) 區別乳児死亡率

乳児死亡率を各區に就いて見るに城東の一・二・八八%を最高として向島(二・二・六一%)、板橋(二・二・六〇%)、本所(二・二・三三%)、荒川(二・二・二九%)、足立(二・二・二一%)の諸區相次いで高率を示し、その最低は赤坂の五・二・四%であつて中野(七・〇・三%)、大森(七・三・四%)、世田谷(七・三・六%)、麴町(七・四・七%)、神田(七・五・七%)等の諸區次に低い。之を前年に較ぶるに各區孰れも低率となつた。

第二十七表 區別乳児死亡

全市	昭和九年	昭和十年	昭和九年	昭和十年
豊島	一、四、三三	一、四、〇九	二、二	九、九
杉並	四、七、七	四、七、七	二、五	九、七
中野	三、三	三、三	七、三	七、三

(ハ) 死亡乳児の體性

昭和十年中本市に於ける乳児死亡者を體性別に見ると男七、七六三、女六、三二八で男一、四三五の超過を示し女百に付男一一・二・七の割合である。

昭和八年以降の乳児死亡数の傾向を見るに男女共に遞減してはゐるが、昭和八年に比し九年は男の減少の割合女より高く、九年に比し十年は女の減少の割合が高く、又孰れの年も男の超過が著しい。即ち女兒の死亡百に付男は昭和八

第四部 人口の自然増加

年の一二五・二より、九年の一二一・七に低下し昭和十年には一二一・七に高昇した。

第二十八表 死亡乳児の體性

年	男	女	女百に付男
昭和八年	八、八〇	七、〇元	一二・二
昭和九年	七、九六	六、四六	一一・七
昭和十年	七、七五	六、三六	一一・七

五、死亡者の配偶關係

死亡者の配偶關係を見ると未婚者最も多く四二、〇五二を計へ總數の五三・八五%を占め、有配偶者の二〇、三二七(二六・〇二%)死別者の一〇、七六八(二六・七九%)之に次ぎ、離別者は八五五(一・一〇%)に過ぎない。

各配偶關係に就き總數に對する割合の變動を見るに未婚者は八年より九年に至り激減したが十年には僅かながら増加した。有配偶者、死別者及離別者の割合の變動は略々其の軌を一にし、昭和八年より九年は高率となり、十年に於て減退を見た。

第二十九表 死亡者の配偶關係

年	死亡數			
	總數	未婚	有配偶	死別
昭和八年	八三、三三九	四三、五二六	二〇、七三三	一八、〇七九
昭和九年	八二、八八六	四三、三三三	二一、四三三	一九、〇二〇
昭和十年	八〇、六〇六	四三、〇三三	二〇、三三七	一七、二三七

總數未配 有配偶 死別 離別 身分不詳

總數百中

昭和八年	一〇〇・〇〇	五二・元	二四・三〇九	二一・三〇
昭和九年	一〇〇・〇〇	五二・三	二四・三	二一・六
昭和十年	一〇〇・〇〇	五二・八五	二四・三	二一・九

第五部 人口の自然増加

一、人口の自然増加

(イ) 總說

昭和十年中本市に於ける人口の自然増加、即ち死亡に對する出生の差増は六五、八三四であつて、前年に比し二〇、三六〇多く、自然増加率、即ち人口千に付自然増加は一

一・二〇で前年より三・一七高率である。既往に遡つて自然増加の趨勢を窺ふに、大正十四年の四萬臺より大正十五年には一躍五萬臺に増加し、昭和三年更に五萬五千に達した。爾來累増を続け昭和七年には七萬に垂んとする勢ひであつたが、昭和八年昭和九年と遞減し四萬臺に迄降り、昭和十年に至り六萬臺に回復し、昭和七年に次ぐ多數を示してゐる。

次に自然増加率を見ると、大正十四年の一〇・九三%より大正十五年の一・二二五%に増加し、昭和四年には聊か低率となつたが概ね一・二〇%臺を持續し、昭和七年は一・三〇%に及ぶ勢であつたが、昭和八年、九年と急激に低下し、昭和九年は曾つて見ざる低率(八・〇三%)を示したのであるが、昭和十年には再び上昇し一一・二〇%を算ふるに至つた。

第三十表 人口の自然増加累年

年	出生	死亡	自然増加	人口千に付自然増加
大正十四年	二八、二七	一七、三六	一〇、九三	一〇・九三
大正十五年	二〇、六八	一八、四六	一・二二五	一・二二五

第五部 人口の自然増加

昭和二年 二六、一六六 七、三六一 一八、八五五 三・二八
 昭和三年 二五、七〇〇 六、〇〇〇 一九、七〇〇 三・〇四
 昭和四年 二〇、〇五〇 七、三三六 一二、七一四 一〇・七一
 昭和五年 一三、三五五 七、二六八 六、〇八七 三・七三
 昭和六年 一三、四二九 六、二二二 七、二〇七 三・三三
 昭和七年 一三、九三三 七、〇六六 六、八六七 三・六六
 昭和八年 一三、八八八 八、三三九 五、五四九 三・九七
 昭和九年 一三、三〇〇 九、八八六 三、四一四 二・五九
 昭和十年 一三、九三〇 六、〇六六 七、八六四 五・六二

(ロ) 區別自然増加率

自然増加を各區に就いて見るに、其の最高は江戸川の七・二一%であつて蒲田(一六・五三%)、葛飾(一五・五三%)、世田谷(一四・六四%)、大森(一四・四九%)、目黒(一四・四六%)の相區相次いで高く、その最低は四谷の五・四〇%で麴町(五・六七%)、本郷(六・〇一%)、日本橋(六・二〇%)、芝(六・二五%)、浅草(六・四八%)の諸區次いで低率である。要之新市部(一三・〇八%)に於て自然増加率高く、舊市部(八・一八%)は著しく低率である。

前年に較ぶるに舊市部、新市部共に高率を示し、各區執

昭和十一年七月十三日 印刷
 昭和十一年七月十四日 發行

東京市芝區芝公園十五號地十一番
 印刷人 勝田茂

東京市芝區芝公園十五號地十一番
 印刷所 勝田印刷所

電話芝(43)一八〇六七番

東京市役所

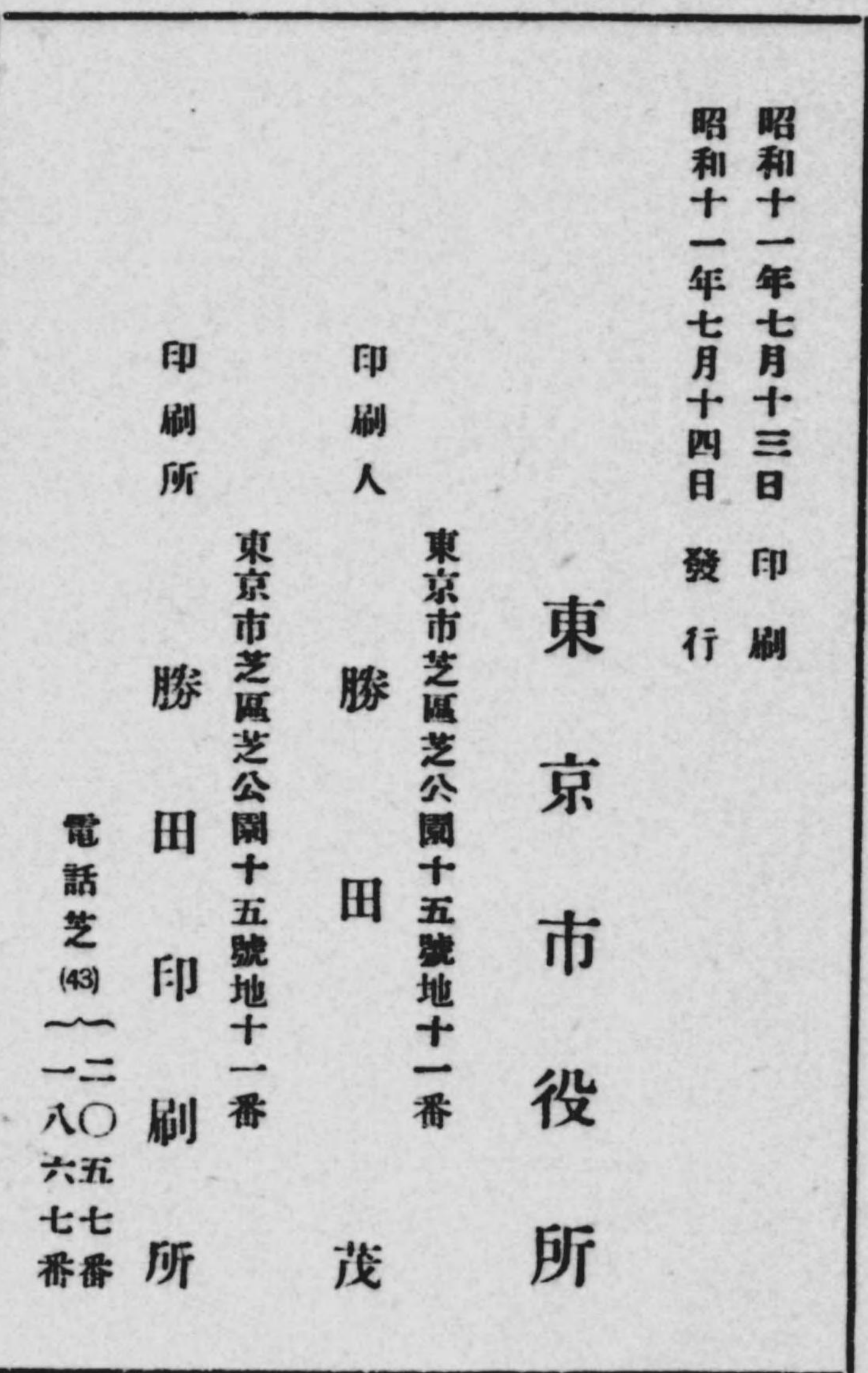
印刷人 勝田茂

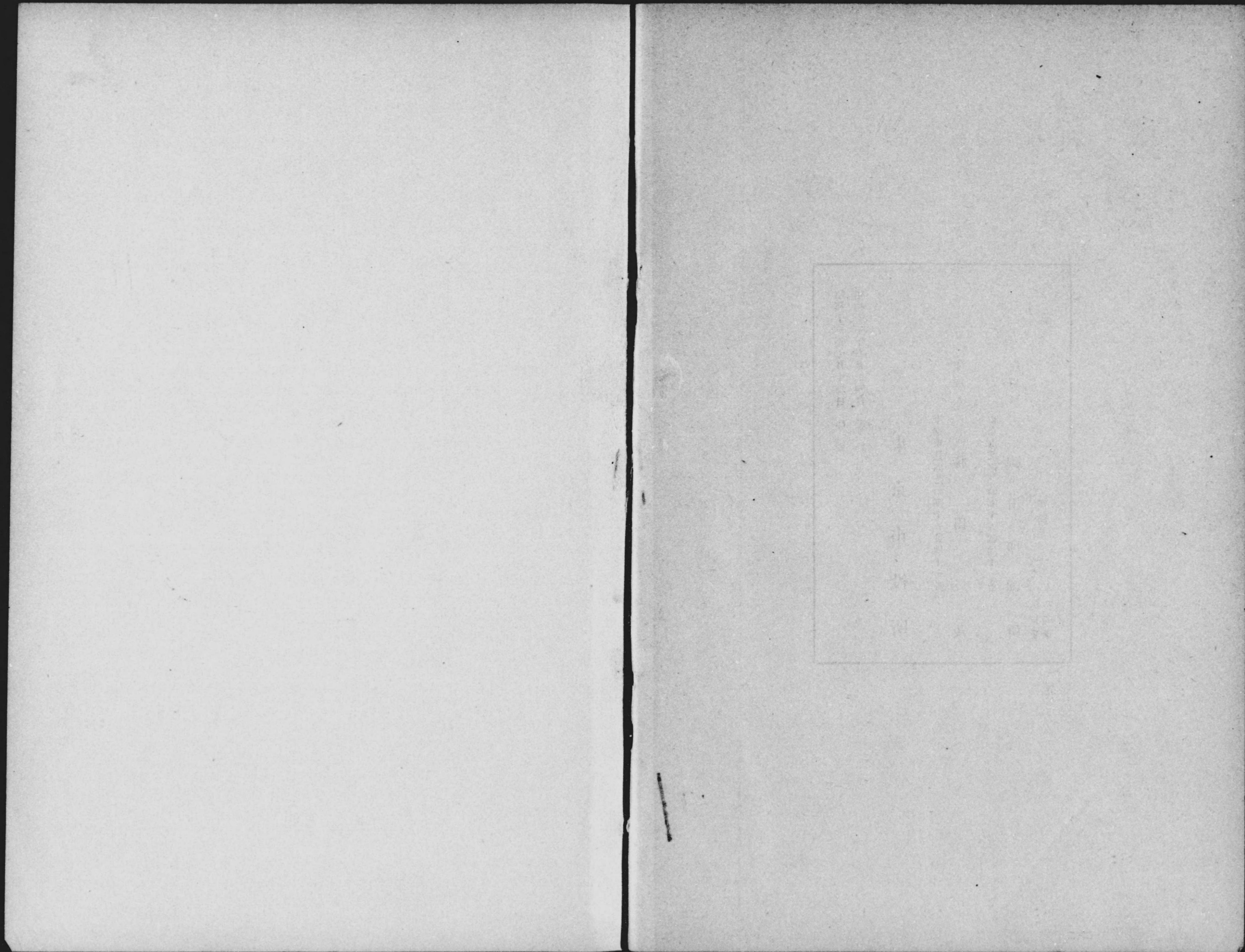
印刷所 勝田印刷所

電話芝(43)一八〇六七番

昭和十一年七月十三日 印刷
 昭和十一年七月十四日 發行

東京市芝區芝公園十五號地十一番





144
1067



1

1

